

Report on the 19th MELTA Conference 2010

酒井志延(千葉商科大学)

MELTA (Malaysian English Language Teaching Association) は、毎年国内の3か所で大会を開く。広い国土事情が良く分かる。本年は、The 19th MELTA International Conference 2010として、クアラルンプール(Kuala Lumpur, KL)、クアンタン(Kuantan)とサワラク(Sawarak)州の首都であるクチン(Kuching)での開催だ。わたしは JACET の代表としてクチンの大会に招待された。

大会は、6月17日と18日の2日間で、今回の大会テーマは、“Transformation in English Language Education: Vision, Innovation, Implementation”である。17日は8時25分から研究発表が6部屋の平行で始まった。第1ラウンドが終了して、開会式や基調講演が始まる。開会式や1回目の基調講演は、教育関係の役人の講演である。それが10時半に終了し Break となった。続いて、2回目の基調講演が始まるが、これも役人の講演である。それが11時40分に終わり、本格的な研究大会が始まる。

私の発表は、40分の枠であった。事前に言われたようにハンドアウトを20部用意しておいた。発表は、日本の大学の英語のリメディアル教育対象の学生を対象にした研究で、できる学生とできない学生には、英語学習に対する意識の差があり、それはメタ認知能力の発達が原因であること、その対策として、英語学習に否定的な意識を持つ学習者に対して、学習に向かわせるために、Maslow が言う「所属の欲求」を学習の場に持たせることが必要で、それを持たせるためには、メンタリングが必要であり、メンタリングによって、彼らを学習に向かわせる気持ちにしたなら、彼らの ZPD をつかむことが容易になるので、その ZPD を押し上げる活動の一つとして、dictogloss をリメディアル学生用に改良した方法が効果的であり、この活動は複数の認知活動を必要とするので、メタ認知能力を高めるためにも効果的であると思われるが、この dictogloss については、実践中で近い将来において結果を発表する予定であると述べた。

発表を始めるまでは、日本のリメディアル教育対象の学生の研究にどのくらいの聴衆が集まるか不安であったが、50名を超える聴衆が集まり、立ち見が出るほどであった。反応もよく、できない学習者はどこの教育現場にでもいるが、研究が少ないのでありがたい発表であったというコメントなどをいただいた。また、ハンドアウトが手に入らない人や更なる情報がほしいのでメールアドレスを教えてほしいという希望が多数あった。結果として、発表に対する聴衆の反応はかなりよかったと思う。特に、サワラク州の Academic Management Unit の Chief Supervisor である Mary Bobby Song は、特に情報の提供を求めてきた。彼女は州の教育全般をみるが、特に slow learners の教育に困っているので、発表を非常に興味深く思ったし、今後も研究成果を知りたいので情報効果をしたいと言ってきた。このような交流が今回の訪問の目的でもあると思い、その依頼に応じ、メールアドレスを交換した。

次に、私以外の一般の発表であるが、私が見た限りすべて英語で行われていた。参加した他の発表者の研究で、興味を引いたのは、3つである。

1つは、Jessica Lim Su Yee (IPG Kampus Batu Lintang)の“Journey of a Novice Teacher Trainer”であり、学部を卒業したばかりで、ほとんど教員としての経験が無い発表者が junior lecturer として、教員トレーニング機関に就任し、そこで2ヶ月間に人間的にも職業人として成長していったかという個人的な成長記録であった。彼女の日記の一部が紹介され、混乱しながらも、成長し、自信を持ち、そして将来の計画まで考えるようになる姿が発表からうかがえた。このような制度は日本にはないが、教員の成長を考える上で参考になった。

二つ目は、Adi Afzal Ahmad(Universiti Teknologi MARA Perlis)の“Language Learning Style Preferences of Low English Proficiency (LEP) Students In a Tertiary Institution”あり、低学力の学生は、自分に合ったラーニングスタイルが与えられていないのではないかという想定のもとに実施された研究結果の発表であった。かれのリサーチクエスションは、2つであり、英語が苦手な学生に合ったラーニングスタイルは何かということと、性別によってラーニングスタイルは変わるだろうかという点である。調査紙での調査の結果、低学力の学生は背景研究からのラーニングスタイルにはいずれも否定的であったということと、女性は視覚を及び聴覚に関するラーニングスタイルでは、男性より高い。一方、運動系、触覚系、そして集団及び個人的なラーニングスタイルは男性の方が高かった。結果そのものは、そんなに感銘を受けるものではないが、研究の視点は日本でも活用できそうであると思った。

三つ目は、Bawani Selvaraj “The Road Not Taken: Critical thinking and Writing” で、クリティカル・シンキングは、21世紀の教育において重要であるが、彼女が自分のクラスの学生のエッセイに関してその説得性を Stapleton (2001)の枠組み(arguments, reasons, evidence, opposition and refutation, conclusion and fallacies)で調査したところ、クリティカル・シンキングは、まだ達成されていないことが分かったと報告した。限られた数の分析であるが、今後日本の教育でも重要になるクリティカル・シンキングに分析の方法が興味深かった。

大会は、予定を45分もオーバーし、2日目の6時過ぎにTeaを始めることで三々五々の解散となった。おおらかなお国柄である。

今大会で、外国からの受け入れの世話をしてくれたのは、MELTAの副会長であるDr Teh Chee Sengであった。彼は、中国系であったので、「街の看板に、マレー語と中国語が良く併記されていますね。中国からの移民がこの町の建設に一翼を担ったのですか」と尋ねると、「まったくそうです。私たちが外国からの研究者を大会に、特にこのような街に招くのは、いろいろなマレーシアの文化を知っていただいて、その方の国で私たちの文化を紹介していただきたいのです」とおっしゃった。そういうことは得意だと思った。

言葉を職業にしているせいか、非英語圏に行くどうしても現地語に興味を持つ。元来

マレー語には固有の文字言語はなかった。それで、植民者の英国人が持ち込んだアルファベットで自分たちの言葉を表記することにした。英語からの借用語は、聞いたとおりにローマ字で表記することにした。そのために英語の綴りと若干違う表記になった。次の単語の元を類推してみよう。teksi, kafe, kamera, bas, polis, benk, ais, kaunter, tiket, tren, stesen, servis, famasi, buku。答えは taxi, camera, bus, police, bank, ice, counter, ticket, train, station, service, pharmacy, book である。英単語を知っている人には、簡単に類推できる。restoran など、英語もこうならないかと思うほどである。なお、日本は **Jepun** とつづる。

日常会話だがこれも面白い。忘れられない思い出がある。ボスニア・ヘルツゴビナ戦争が終わった 2001 年に、その隣国スロベニアに行った。現地語を覚えて、ホテルの従業員に「おはよう」と言った。最初、相手は何を言っているのであろうと怪訝な顔をした。もう一回言ったら、「この日本人は自分たちの言葉を使おうとしている」というのが分かったのか、満面の笑みを返してくれた。それ以来、必ず簡単な現地語は覚えることにしている。今回もホテルでやってみた。「おはよう」は「スラムット・パギ」だ。このあいさつをし、ドアを開けてくれたら「トリマカシ (ありがとう)」と言う。するとホテルの従業員はまず好意を持ってくれる。英語で「こういうことを言いたいがマレー語では何と言いますか」と英語で聞くとていねいに教えてくれる。How much? も必要だ。「ムラッパ」と言う。店に買い物に行くと、「スラムット・デンツガハリ (こんにちは)」、「アカパッカ (ご機嫌いかが)」、「ムラッパ?」、「トリマカシ」、「スラムット・ジャラン (さようなら)」。これで、だいたい好意を持たれることは間違いない。今回は、**Kamu Sagat Cantik**. に興味を持った。これは、**You're very beautiful**. という意味である。言語習得は、実践的に学ぶことが必要なので、コミュニケーションな場面でたっぷりと繰り返し練習をした。